2026 年3月 15 日 受難節 第 4 主日礼拝メッセージ

「神は留まってはおられない」　　牛田匡牧師

聖書 マルコによる福音書 9章 2−13節

先週の水曜日 3 月 11 日は、東日本大震災が起こってから 15 年目となる日でした。あの大災害の年に生まれた子どもたちが、もう 15 歳になるのかと思うと、年月の流れる速さに改めて驚かされます。個人的な事で言えば、当時私は関東に住んでいました。そして、あの震災の経験があったから、今があるのだろうと思っています。ですので、3 月 11 日になると、様々なことを思い返します。とはいえ、今は関西にいて、2026 年の今年の 3 月 11 日に周りの人たちと話題になったのは、アメリカとイスラエルによるイランとの戦争の事でした。

先月末に攻撃が開始されてから 2 週間となりました。アメリカのトランプ大統領は「短期間で決着をつける」ようなことを言っていましたが、戦況は拡大し、一向に収束しません。イランでは多くの子どもたちが爆撃の犠牲になったと報じられていますし、世界の燃料供給の「大動脈」とも言えるホルムズ海峡が封鎖され、世界経済に大きな影響が出るなど、大変なことが続いています。原油輸入の 9 割を中東に依存している日本では、ガソリン価格が先週の一晩で 30 円近く上がり、「このままでは生活がどうなっていくのだろうか」ととても不安に感じてしまいます。

人々の生活も命も、町も文化も歴史も、それこそこの地球そのものを破壊し、滅ぼし尽くすだけの大量破壊兵器が世界中にいくつも存在している現実の中で、「戦争は終わったけれども、後に残ったのは、全ての命が死に絶えた世界のみ」というような SF 小説のような未来が、いつ来てもおかしくないというのは、考えるだけでも恐ろしくなる狂気の沙汰です。そんな狂った現実世界の中で、各国の舵を取っている為政者たちは、長期的な視点で世界情勢を把握し、政策決定するどころか、トランプ大統領にしても高市首相にしても、ますます視野は狭くなり、近視眼的になって来ているように思えてなりません。目先の利益、報復に躍起になるあまり、その後ろに待ち構えている地球規模での落とし穴が目に入っていないのではないかと心配です。

しかし、そのような希望を持ちにくいような世の中にあってもなお、命そのものが輝きを持っているのは確かです。先週、一昨日の金曜日と、昨日の土曜日には、い

くつかの保育園・こども園で卒園式が行われました。今週に卒園式が予定されている保育園もあります。小さな小さな体で生まれて来て、目も開かなかった子どもたちが、わずか数年で大きく大きく成長して、卒園していく姿に、保護者の方々も、また携わられていた保育士の先生方も目に涙を浮かべられていました。誇らしげにほほ笑んでいる子どもたちの笑顔を見ながら、それこそが命の輝きであって、それらを守ることが全ての命を作られた神様の御心であることを改めて感じさせられました。子どもたちの未来を守るためにも、お互いの命を傷つけ破壊し合う戦争は、決して許されてはなりません。さて、今、この時代の中にあって、聖書は私たちに何を語っているでしょうか。私たちは聖書から、何を聞くでしょうか。

今回のお話は、「山の上で、イエス様の姿が変わった」というお話でした。ペトロとヤコブとヨハネの 3 人が、イエス様に連れられて高い山に登り、そこでイエス様が光り輝く姿に変わって、エリヤとモーセと出会った、という何とも現実離れした不思議なお話です。「マルコによる福音書」だけではなく、「マタイ」にも「ルカ」にも記されていますから、それぞれの福音書を記した人たちにとって、よく知られていたお話であり、また書き記しておく必要がある重要なお話だと思われていたのでしょう。

いきなり、目の前で隣にいる人が白く光り輝き、さらにその隣には大昔の伝説の人物たちが現れて、3 人で話し始めるなどというのは、ファンタジー映画ではよくあるかもしれませんが、現実にはないことです。福音書の記者たちは、このお話を書き記し、配置することによって、イエス様が「神の子として、いよいよ受難の道を歩んでいく」ということを表わすため、一つのターニングポイント、転換点としたかったのでしょう。普段の日常生活を送っている平野ではなく、「山の上で神と出会う」というのは、モーセがシナイ山で神と出会って十戒を授かったように（出エジプト 24 章、34 章）、「ヘブライ語聖書」由来の人々によく知られた場面設定でした。また 7 節にある「雲が覆った」というのも同様です（出エジプト 40：34−35）。

このお話は、イエス様の特別性を強調するような書き方になっています。例えば、モーセは顔が輝きました（出エジプト 34：29−35）が、イエス様は顔だけではなく衣（ころも）全部、体全体が輝きました。つまり、古代イスラエルの民をエジプトから導き出したリーダーであり、律法を授けられたモーセよりも、イエス様の方がすごい。ま

た預言者の代表として考えられ、伝説になっていたエリヤとも、モーセとも対応に語り合うほどに、イエス様はすごかった、というわけです。さらに、そこで見たことを、ペトロとヤコブとヨハネという選ばれた 3 人だけが教えてもらって、誰にも話さないようにと秘密の約束をした、などなど……。しかし、そのような福音書記者たちの理解や思惑(おもわく)とは別に、イエス様自身が身をもって伝えたかったことは、もっと違う所にあったのではないでしょうか。

預言者エリヤは「死んだ」と書かれておらず、生きたまま「火の戦車に乗って、つむじ風の中を天に上って行った」(列王記下 2:11)と記されていますので、再び世に現れると考えられていましたし、モーセは「死んだ」と書かれている(申命記 34:5、ヨシュア 1:1-2)にもかかわらず、「誰も彼の葬られた場所を知らない」(申命記 34:6)ともあるために、「実は死んでいないのではないか」と考えられるようにもなっていたようです。そのような言い伝えが広く信じられていた時代でしたから、ペトロたちは山の上で、輝くイエス様と語り合う見知らぬ二人の姿をモーセとエリヤとして認識しました。もちろん、写真もなければ、肖像画もありませんから、実際には確認しようがありませんし、太陽の光で雲に人影が写るという現象は、山の上ではよく見られますから、イエス様に向かって太陽の光が降り注ぎ、それが反射したのではないかなどと科学的に説明することもできるのではないかとも思います。ですが、これらの開設にはあまり意味はなさそうです。

ともかく、ペトロは、目の前で普通じゃないことが起きていると思い、「非常に恐れ」、「どう言えばよいか分からず」(6)、よく分からないことを言いました。「先生、私たちがここにいるのは、すばらしいことです。幕屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのために」(5)……。ここで言われている「幕屋」とは、いわゆるテントのことです。古代イスラエルの民の先祖は遊牧の生活をしていましたし、出エジプトの際も 40 年間、旅の生活を続けていましたから、テント住まいでした。ここでペトロが「幕屋を建てましょう」と言ったのは、「ここに記念を残しましょう」ということだったのではないでしょうか。イエス様がモーセとエリヤと語り合ったという特別な出来事を、特別に選ばれた自分たちが経験した。それを忘れないように記念しよう、ここに留めておこうとしたのではないでしょうか。

何かがあった場所に、記念碑を建てるというのは、世界中で大昔から行われていることです。ヘブライ語聖書でも「創世記」35 章でヤコブはベテルで神が自分に語られたことを記念して石の柱を立てています。また日本で言えば、今でも全国各地に「天皇が来た場所」「天皇が植えた木」などがあるのも同じような人間の心理だと思います。そこに行けば、かつての特別な出来事を思い出す。縁起がいい。神からの特別のパワーが与えられる。それこそいわゆる「パワースポット」だということでしょうか。しかし、歴史の中のイエス様はそうではありませんでした。「ここに幕屋を建てて記念しましょう」「神の力がここに、自分たちに留まっていますように」というペトロの願いとは裏腹に、モーセとエリヤの姿は消え（8）、イエス様は弟子たちと共に山を下りました（9）。神は一カ所には留まってはおられない。どこかの誰かだけを特別扱いはしない、ということです。

「これは私の愛する子」（7）という天の声を、マルコ 1 章 11 節では、イエス様が聞きましたが、同じ声を今度はペトロら弟子たちも聞きました。「これに聞け」（7）とは、イエス様の言葉を聞き従いなさいというだけではなく、イエス様と共に生きていきなさい、歩んでいきなさい、ということです。そしてそれは、山の上の幕屋の中に祀られて、神殿の中に留まる生き方ではなく、山を下りて人々と共に交わる生き方でした。イエス様の受難は、誰か特定の一部の人々のために「身代わりに十字架に架かってあげる」という「特別な目的」ではなく、イエス様が人々と交わり抜いた結果として「十字架に架けられてしまった」出来事であり、それは特別なことというよりも、むしろ普通の日常の延長のことでした。

命の神はどこにおられるか。目に見えない神は、イエス様の姿と生き様を通して私たちの目に見える形となりました。その神の子イエス様は、決して山の上の「特別」には留まっておられませんでした。それ故、私たちはこの日々の日常の中で、イエス様と出会います。たとえこの現実世界が、神様の御心に反して命を傷つけ続けている世界であったとしても、それでもなおイエス様はその泥沼の中に共におられて、命を守るために懸命に尽くされている方々と共におられます。私たちは過去の「特別」を記念して覚えるのではなく、今のこの日々の命が与えられ生かされていること、それこそが特別であるということを、覚えて過ごして参ります。